

萬葉集新考卷十七下

186

159

186-159



1200601257173

井上通泰著

萬葉集新考 卷十七下

大正

15. 2. 27

内交

歌文珍書保存會

萬葉集新考卷十七下

歌のしをり

観にの番號は國長歌大

三九七三 おほきみの△

一九七

三九七五 やまぶきは

一〇五

三九七五 わがせこに△

一〇七

杪春餘日媚景麗

一〇七

さけりとも

一一一

あしがきの

一一二

三九八〇 いももあれも△

一一二

三九八〇 あらたまの

一一七

三九八〇 ぬばたまの

一一七

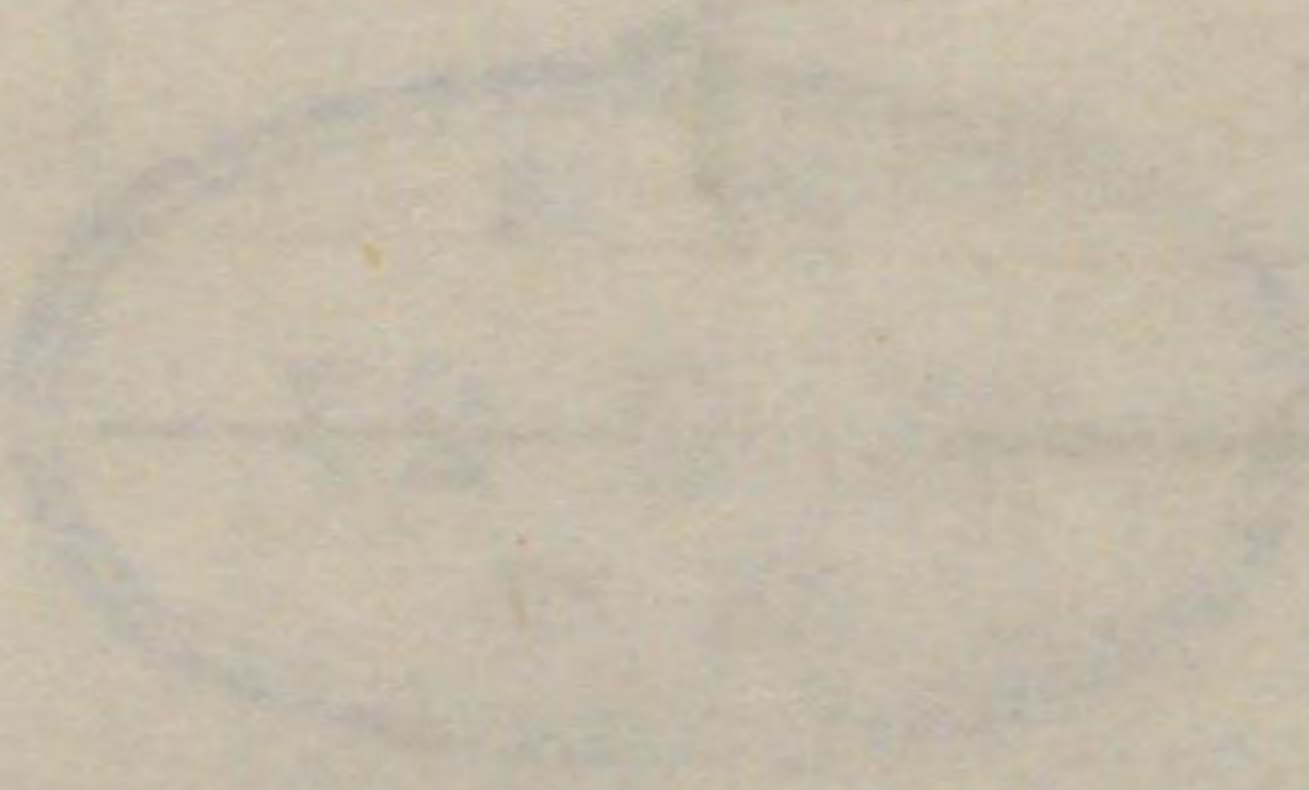
あしひきの

一一八

我土歌集卷十七下

萬葉集新考卷十七下

和文全書



はるはなの

あしひきの

たまにぬく

三九八五 いみづがは

しぶたにの

たまくしげ

ぬばたまの

なごのうみの

三九九〇 わがせこは

もののふの

ふせのうみの

ふちなみは

しらなみの

一一八

一一九

一二〇

一二二

一二三

一二四

一二五

一二八

一三三

三九九五 たまほこの

わがせこが

あれなしど

わがやどの

みやこべに

四〇〇〇 あまざかる

たちやまに

かたかひの

あさひさし

たちやまに

四〇〇五 おちたぎつ

かきかぞふ

わがせこは

一三四

一三五

一三六

一四二

一四三

一四四

一四八

一四九

一五四

四〇一〇

あをによし
たまほこの

一五四

うらごひし
おほきみの

一五八

やかたをの
ふたがみの

一五九

まつがへり
まつの

一六六

四〇一五

まつの

まつの

一六七

めひのぬの
あゆのかせ

一七〇

あまざかる
みなとかせ

一七一

四〇二〇

あまざかる
こしのうみの

一七二

四〇二五

をがみがは
うさかがは
めひがはの
たちやまの
しをぢから
とぶさたて
かしまより
いもにあはず
すすのうみに
うぐひすは

一七六

一七七

一七八

一八〇

一八一

一八四

一八六

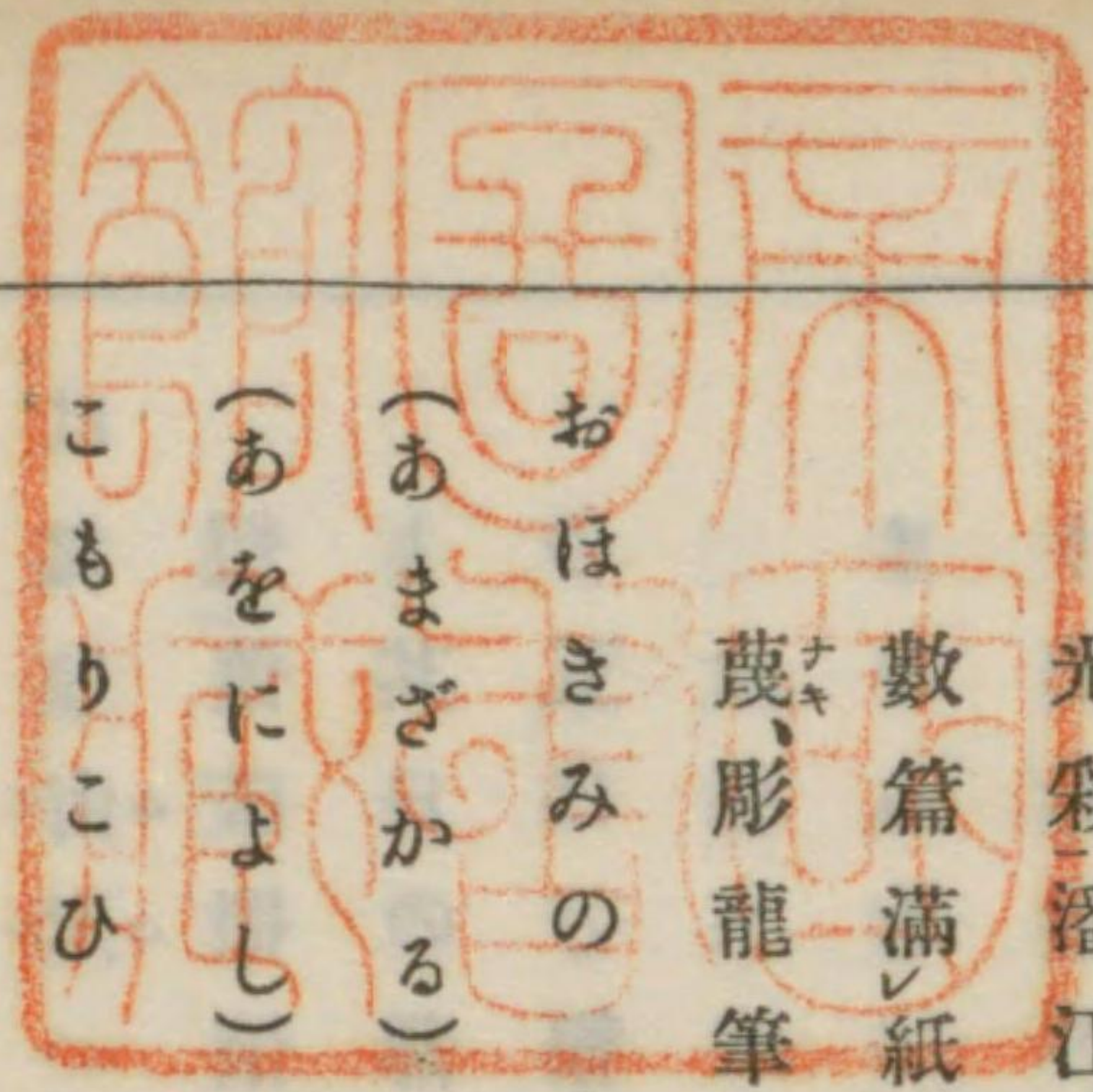
一八八

一八九

四〇三二

なかとみの

〇 昨日述短懷、今朝汗耳目、更承賜書、且奉不次、死罪謹言
 不遺下賤、頻惠德音、英雲星氣、逸調過人、智水仁山、既韞琳瑯之
 光彩、潘江陸海、自座詩書之廊廟、騁思非常、託情有理、七步成章、
 數篇滿紙、巧遣愁人之重患、能除戀者之積思、山柿誦泉、比此如
 蔑、彫龍筆海、粲然得看矣、方知僕之有幸也、敬和歌、其詞云



〇 昨日述短懷、今朝汗耳目、更承賜書、且奉不次、死罪謹言
 不遺下賤、頻惠德音、英雲星氣、逸調過人、智水仁山、既韞琳瑯之
 光彩、潘江陸海、自座詩書之廊廟、騁思非常、託情有理、七步成章、
 數篇滿紙、巧遣愁人之重患、能除戀者之積思、山柿誦泉、比此如
 蔑、彫龍筆海、粲然得看矣、方知僕之有幸也、敬和歌、其詞云

おほきみの
 (あまざかる) ひな毛をさむる ますらをや なにかものもふ
 (あをによし) ならぢきかよふ (たまづさの) つかひたえめや
 こもりこひ いきづきわたり したもひ余 なげか布わがせ
 いにしへゆ いひつぎくら之よのなかは かすなきもの賀
 ながさむる こともあらむと さとびどの あれにつぐらく
 やまびには さくらばなちり かほごりの まなくしばなく

春野に すみれをつむと しろたへの そでをりかへし くれ
なるの あかもすそびき をとめらは おもひみだれて きみ
まつと うらごひすなり ころろぐし いざみにゆかな こと
はたな由比

短懐は拙懐なり。昨日述短懐は三日に遊覽し四日に其詩を作
り其日の薄暮に家持に贈りしを云へるなり。次に見ゆる家持
の五日の報書に

昨暮來使幸也、以垂晚春遊覽之詩

とある是なり。略解に『それを五日朝贈りしに』といへるは誤れ
り○今朝汗耳目は今朝耳目ヲ汗スラムとよみて今朝御覽下
サルル事デアラウの意とすべし。古義に
さて即日家持卿より其に和へられし詩歌などのありしに
よりてそのよろこびに今五日左の長歌短歌など贈りし故

に今朝汗耳目とはいへるなるべし
といへるは非なり○更承賜書は更ニ賜書ヲ承ラバとよむべ
し。略解に

又家持卿よりおし返しおこせし故に更承賜書といふ

といひ古義にも

立かへりて家持卿より三日遊覽の詩文に和へて池主へ贈
られしがありしを云り

といへるは誤れり。池主より四日に贈りし詩(即三日遊覽の七
律)と五日に贈りし此歌とに家持の答へしが即次の詩歌なり。

其前に答へし詩歌は無きなり○且奉不次は且不次ナルヲ奉
ラムとよむべくや。不次はこゝにては順序ノ立タヌモノとい
ふ意に用ひたるならむ○德音はアリガタキ仰といふ事なり。
頻惠德音は二月二十九日と三月三日とに歌を贈られしを云

へるなり。○英雲星氣は逸調過人と對せず。英靈負氣の誤か。元曆校本を検するに英靈とあり。負氣とある本も出でよかし。○智に水を配し仁に山を配したるは論語の智者樂水仁者樂山に據れるなり。琳瑯は玉の名なり。瑯は琅の俗字なり。○潘江陸海は文選作者中の巨擘なる潘岳と陸機陸雲兄弟との文才を江海に比したるなり。坐廊廟は堂ニ升レリといはむが如し。二註に『常に道藝の中に身を置くよしなり』といへるは従はれず。○次句を二註に騁思非常託情有理とよめるは非なり。思ヲ騁スルコト常ニアラズ情ヲ託スルコト理アリとよむべし。○七歩は魏の曹植が僅に七歩にして

煮豆持作羹、漉豉以為汁。其在釜底然、豆在釜中泣。本是同根生、相煮何太急。

といふ詩を作りし故事なり。○彫龍は史記の孟子苟卿列傳に

見えたり。龍文を彫ることにて文飾の譬なり。得は可の誤か。○敬和は此月三日に家持より贈りしオホキミノマケノマニマニといふ歌に和せるなり

ヤマ野サハラズは山野ニ障ラズのニを略せるにて野山ニ妨ゲラズとなり。○ヒナ毛の毛を宣長は乎の誤なるべしといへれどもとのまゝにて鄙ヲモの意とすべし。云々シテ鄙ヲモ治ムルホドノヲヲシキ大夫ヨといへるなり。古義に『毛の辭は上にめぐらして山野と云にかけて見べし』といへるはいみじきひが言なり。○マストラヲヤのヤはヨなり。古義に疑辭とせるは非なり。ナニカはイカナレバカなり。何ヲカの略にあらず。何ニカの略なり。モノモフは心をいたむるなり。さてマストラヲは勿論家持を指せるなり。○ナラヂは奈良より越中に通ふ路なり。○シタモヒ余の余は略解にいへる如く爾の誤なり。ナゲカ

布ワガセの布は古義に須の誤とせるに従ふべし。反歌のナゲカ布は自身の事なればナゲカフにて可なれどこゝは人の上なればナゲカスとあらむ方まされり。○クラ之の之は略解に云へる如く久の誤とすべし。イヒツギクラクは云ヒ繼ギ來ルヤウハとなり。○モノ賀は諸本にモノ曾とあるに従ふべし。ナグサムルコトモアラムトのトはイヒツギクラクを承けたるなり。此二句は人生行樂耳の意なるべし。○サトビトノの上にサテを加へて心得べし。○ヤマビニハ云々の四句は春野の裝飾辭なり。古義に

ヤマビニハのニハは他處に對へていふ言なり。山ビニハ云云春野ニハ云々といふ意なり

といへるは非なり。野を主としていへるにて山邊ニハ云々スルソノ春ノ野ニといへるなり。○ソデヲリカヘシは袖口の長

きが妨となればそを折り返すなり(此卷七五頁参照)○略解にウラゴヒスナリの次に詞足はず。句の落たるならん

といひ古義には

ウラゴヒスナリの次にカヤウニ告ツルゾと云詞を加へて聞べし

といへり。スナリの下にトを略したるなり。里人の辭はウラゴヒスナリまでなり。○ココロダシは懊惱ニ堪へズとなり(十二卷一三五頁参照)○コトハタナ由比の語例は十三卷にあし垣の末かきわけて君こゝと人になつげそ事者棚知とあり。宣長は

凡此類のタナといふ詞皆(○一卷身モ、タナシラズ、九卷身ハタナシラズまた身ヲタナシリテ)タナ知とつづきたるにこのみ由比とつづきたるはいかが。由比は思禮の誤なるべ

し。十三の卷の棚知も必タナシレと訓べき語の勢也。さてコトハは集中コトサケバ、コトフラバ、古今集にコトナラバナ
 ぞある殊なり。さてタナシレは詳ならざれども大かたのや
 うを以ていはば今俗語に云々と人に物をいひつけてサヤ
 ウニ心得ヨといふに似たり。十三の卷なるは人ニ告ル事ナ
 カレ、サヤウニ心得ヨなり。こゝなるは世中ハ數ナキモノゾ
 里人モ云々ト告ル也、然レバ春ノ野山ニ遊ビテ心ヲヤルベ
 キコトゾ、サヤウニ心得タマヘ、イザ共ニ見ニユカンといふ
 也云々

といへり。又古義に右の説を擧げて
 但しコトは如なり。殊とかけるは借字にて字義にはあらず。
 さればこゝはカクノ如クニ心得ヨといふ意にきこえたり
 といへり。タナ由比はげにタナシレの誤なるべし。さてそのタ

ナはタダのうつれるにや。さらばタナシレはタダニシレなり。
 シレは領承セヨの意ならむ。又コトは事にてコノ事ハの意な
 らむ

やまぶきはひにひにさきぬうるはしとあがもふきみはしくし
 くおもほゆ

ヒニヒニサキヌは日々ニサキマサリヌなり。二三の間にソレ
 ヲ見ルニツケテモといふことを補ひて聞くべし。二註にソノ
 山吹ノ日々ニサクゴトクと補譯せるはわろし○次なる家持
 の答歌によれば山吹を添へて贈りしなり

わがせこに古非須弊奈賀利あしがきのほかになげかふあれし
 かなしも

三月五日大伴宿禰池主

第二句は十二卷(一二二頁)にワギモコニ戀爲便名鴈とあるに

依れるならむ。戀ヒテスベナミといふことにや○アシガキノ
ホカニナゲカフは契沖が『病者に頻々對面せむ事のかたけれ
ばなり』といへる如し。略解に

アシ垣ノ外ニナゲカフとは家持卿と池主と離れ居てあれ
ばかくいへり(○アシガキノを枕辭とせるなり)

といひ古義に

アシガキノは枕詞なり。ホカニナゲカフは家持卿は守、池主
は掾にて隔り居られし故にかく云り

といへるは非なり。家持の答歌にアシ垣ノホカニモキミガ
ヨリタタシとあるを見ればアシ垣ノは決して枕辭にあらず

○

昨暮來使幸也、以垂_ニ晚春遊覽之詩、今朝累信辱也、以_ニ相招望
野之歌、一看_ニ玉藻稍寫_ニ鬱結、二吟_ニ秀句、己_ニ蠲_ニ愁緒、非_ニ此眺翫、孰能

暢_レ心乎、但_ニ惟_ニ下僕稟性難彫、闔神靡_レ瑩、握_レ翰腐毫、對_レ研忘_レ渴、終日

因_レ流、綴_レ之不能、所謂文章、天骨習_レ之不得也、豈堪_ニ探_レ字、勒_レ韻叶_ニ和

雅篇_ニ哉、抑聞_ニ鄙里少兒、古人言無_レ不酬、聊裁_ニ拙詠、敬擬_ニ解、吟_ニ焉(如

今賦_レ言勒_レ韻同_ニ斯雅作之篇、豈殊_ニ將_レ石同_レ瓊、唱聲遊走曲歟、抑小

兒警濫_レ諂_ニ、敬寫_ニ葉端_ニ式擬_レ亂日)

七言一首

抄春餘日媚景麗、初己和風拂自輕、來燕銜泥賀_レ字_レ人、歸鴻引_レ蘆廻
赴_レ瀛、聞君嘯_レ侶新_ニ流曲、禊飲催_レ爵泛_ニ河清、雖_レ欲_レ追_ニ尋良_レ此宴、還_レ知染

隩脚踏_レ釘

短歌二首

さけりともしらすしあらばもだもあらむこのやまぶきをみせ

つつもとな

あしがきのほかにもきみがよりたたしこひけれこそはいめに

みえけれ

三月五日大伴宿禰家持臥病作之

池主より四日の暮に贈りし詩と五日の朝に贈りし歌とに答へたるなり○幸也は辱也におなじく垂は貶におなじ。幸也辱也は現代書翰文の『仕合せに存候、忝く存候』なり。累信は再度の音信なり。古義に

昨暮來使は池主の許より三日遊覽詩を昨四日に持來しその使なり。さて家持卿のそれに和へられたるに又謝へて上件の長歌等を今五日に池主より贈りしを今朝累信とは云るなり

といへるうち點を批ちたる處は誤解なり。家持は四日の暮に受取りし詩と五日の朝に受取りし歌とに對して始めて此和詩答歌を贈りしなり○相招望野は池主の歌にイザ見ニユカ

ナとあるを言へるなり○寫は詩經、衛風竹竿に駕言出遊、以寫ニ我憂とあり。ノゾキなどよむべし○眺翫は誤字ならずや。古義に但惟の二字をつらねてタダとよめり。宜しくタダオモフニとよむべし○難彫は論語公冶長第五の朽木不可彫也(彫は正平本に據れるなり。通本には雕とあり)にもとづきたるなり。稟性と闇神と相對せず。おそらくは柔性の誤ならむ。闇神はクラキココロなり○翰はフデなり。毫は毛なり。渴は乾にて研の水の乾くをいへるなり○契沖は歸去來辭の臨清流而賦詩を因流綴之の典據としたれど因流は略解にいへる如く因循の誤ならむ○天骨は天性なり。二註に文章ノ天骨とよめるは非なり。文章ハ天骨とよむべし○探字は字の平仄を尋ぬるなり。勸韻は韻を更へざるなり。叶は協の俗字なり。豈堪云々は次韻を能くせざるを云へるなり○鄙里少兒はココモトノ兒ドモと

いふ意にて抑聞云々は確ナラヌ事ナレドシカジカトイフ語
 ガアルサウナリといふ意ならむ。古義に吾里ノ小兒スラヨク
 知テ居ルホドノ事ナレバと譯せるはいかが○言無レ不レ酬は詩
 經大雅蕩之什、抑に無言不_レ離_レ無_レ德不_レ報とあるに據れるなり。否
 顯宗天皇紀に聞_レ諸老賢曰、言無_レ不_レ酬德無_レ不_レ報に據れるならむ
 ○解咲は解頤にひとし○如今以下三十八字は或本に無く又
 或本には細書せり。恐らくは豈堪以下の一案ならむ。將石同瓊
 ははやく三日に贈りし歌の序にいへり。僅に一日を隔て、再
 言ふべきにあらず。されば如今云々が初案、豈堪云々が再案な
 らむ。唱聲以下十二字心得がたし。唱聲は倡婦の誤か。譬濫は謾
 濫などの誤か。諂は諸本に謠とあるに従ふべし。その下におそ
 らくは歎をおとせるならむ○葉端は紙端なり。亂は詩賦のと
 ちめなり。文選北征賦以下に見えたり

抄は抄の誤なり。抄は季におなじ。餘日は残る日數なり。略解に
 『遲日といふ意なるべし』といへるは非なり○初己は即上己な
 り○來燕云々は淮南子に大廈成而燕雀相賀とあるに據れる
 なり。賀字入は略解に賀入_レ字の誤とせるに従ふべし○歸鴻云
 云はおなじく淮南子に雁銜蘆而翔以避_レ矰繳とあるに據れる
 なり。廻は諸本に迴とあるに従ふべし。瀛は海なり○嘯侶はト
 モヲヨビテとよむべし。文選曹植の名都篇に鳴_レ儔_レ嘯_レ匹侶とあ
 るによれるなり。新は略解に従ひて親の誤とすべし。流曲は河
 曲なり○褻飲は上己に褻しよりて酒を飲むなり。爵は盃なり。
 河清は河ノ清キニとよみて清キ河ニと心得べし○良此宴は
 略解にいへる如く此良宴を顛倒せるなり○染隩は諸本に染
 悞こあり。寧之に従ふべし。鈴訂は字書に徐行不正貌とあり
 さけりとも

モダモアラムは何トモ思ハデアラムヲとなり○此歌は十卷に見えたる
 さきぬとも知らずしあらばもだもあらむこのあきはぎを
 みせつつもとな
 の秋萩を山吹に更へたるのみ
 あしがきの

ホカニモのモは意なし。古義に『モは吾如ク君モの謂なり』といへるはいみじき誤なり。コヒケレコソハは戀ヒケレバコソなり

述戀緒歌一首并短歌

妹も吾も ころろはおやじ たぐへれど いやなつかしく 相見ば
 どこはつはなに 情ぐし 眼ぐしもなしに はしけやし
 あがおくづま△大王の みことかしこみ(あしひきの)やまこ

えぬゆき(あまざかる)ひなををさめに 別來し その日のきはみ
 (荒璞の)としゆきがへり 春花の うつろふまでに 相見ねば
 いたもすべなみ(しきたへの)そでかへしつつ 宿夜おちす
 いめには見れど うつつにしたらだにあ良ねばこひし
 けくちへにつもりぬ 近在者かへりにだにも うちゆきて
 妹がたまくら さしかへて ねてもこましを(たまほこの)路はし
 とほく 關さへに へなりてあれこそ よしゑやし よし
 はあらむぞ 霍公鳥 來鳴むつきに いつしかも はやくなり
 なむ うの花の にほへる山を よそのみも ふりさけ見つつ
 淡海路に いもき能りたち(青丹吉)奈良の吾家に(ぬえ鳥の)
 うら奈氣△しつつ した戀に おもひうらぶれ かごにたち
 ゆふけとひつつ 吾をまつと なすらむ妹を △安比て早見む
 戀緒はやく上(八二頁)に見えたり

オヤジはオナジの古言なり。さて代匠記にオヤジを句絶とし
 たるを略解にタグヘレドに續けて『心は同じくたぐふ也』とい
 へり。オヤジクとあらでオヤジとあれば無論句絶とすべし。○
 タグヘレドは一緒ニ居レドモなり。○トコハツハナニは常初
 花ノ如クといふことにてトコメヅラシクといはむに同じ。○
 ココログシメグシは心グキ事目グキ事といふ意の名詞にて
 (形容詞の原形をそのまゝ名詞としたるなり)その心グキ事目
 グキ事は懊惱といふことならむ(此卷一〇三頁参照)古義に
 このナシニは無シニの意にあらず。ケシキをケシカラヌと
 いふなどと同例にてただ詞なり。心にも目にもなつかしと
 思ふと云ことなり
 といへるは非なり。○ナシニといふ辭係る處なくてただよへ
 り。○オクヅマは略解に

オクニ思フ(〇三卷一三五頁)とよめるは深く思ふをいふ。是
 も深く思ふ妻也
 といへり。オクヅマの下に乎の字ありしがおちたるならむ。た
 とひ乎を略して聞ゆべくともことさらに乎を省きて六言と
 すべきにあらざればなり。ワカレコシソノ日ノキハミ云々は
 前年の七月より今年の三月まで相見ざるをいへるなり。○袖
 カヘスは例の夢に見む呪なり。上(九八頁)なる袖ヲリカヘスと
 は別なり。○タダニア良子バの良は波の誤ならむ。反歌第二首
 の第四句のうつれるならむ。○コヒシケクは戀シキ事ガなり
 ○カヘリニダニモは六卷(一四六頁)なる同じ作者の歌に
 關なくばかへりにだにもうちゆきて妹がたまくらまきて
 ねましを
 とあり。契沖は俗にタチガヘリニといふが如しといへり。○路

ハシのシは助辭なり。關といへるは越前と近江との間なる愛^{アラ}發^チ關なり。但六卷なるは不破關なり。○へナリテは今ならばへダテテといふべきなり。古今物いひの異なるなり。アレコソの下に契沖等のいへる如く行キテモ得逢ハネといふことを略したるなり。○ヨシハアラムゾのヨシはスベなり(此卷五六頁参照)。契沖が『五月に正税帳を以て京に入べき故なり』といへる如し。○ヨソノミモはヨソニノミなり。イユキ能リタチを二註に『舟に乗るなり』といへるは従はれず。能を伊の誤とすべし。紀路ニイリタツマツチ山(四卷六六頁)のイリタツなり。○ウラ奈氣のウラは心なり。奈氣は歎といふこと。おほゆれど歎をナゲとはいふべからず。おそらくは氣の下に伎をおとしたるならむ(十卷一三〇頁参照)。○オモヒウラブレはオモヒシヲレなり。ユフケは夕占なり。ナスは寐タマフなり(五卷二〇頁参照)。安

比は略解にいへる如く由伎の誤ならむ。○十卷一三〇頁参照。○オモヒウラブレはオモヒシヲレなり。ユフケは夕占なり。ナスは寐タマフなり(五卷二〇頁参照)。安

ゆるかも
トシカヘルは長歌に年ユキガヘリとあるにおなじ
(ぬばたまの)いめにはもとなあひ見れどただにあらねばこひや
まずけり

モトナはあらずもがなと思ふ時にいふ辭なり。今は呪さへして夢に見るなればモトナとはいふべからず。○タダニアラネバは直ニアヒ見ルニアラネバの意なり。コヒヤマズケリはコヒヤマザリケリを古風にいへるなり
(あしひきの)やまきへなりてとほげどもこころしゆけばいめに
みえけり

ヤマキへナリテは山ヲ來隔リテなり。上なる長歌にも見えた

春花のうつろふまでに相見ねば月日よみつついてもまつらむぞ

右三月二十日夜裏忽兮起戀情作大伴宿禰家持

長歌にもアラタマノ年ユキガヘリ春花ノウツロフマデニア
ヒ見ネバとあり

立夏四月既經累日而由未聞霍公鳥喧ナク因作恨歌二首

(あしひきの)やまもちかきをほととぎすつきたつまでになにか
きなかぬ

三月二十九日に作りし歌なるに立夏四月既經累日といへる、
いぶかし。四月はおそらくは已來の誤ならむ。累日は數日なり
○由は猶の通用なればナホとよむべし(此卷七九頁參照)○因
作恨歌を二註に『作恨は下上になれるか』といへり。宜しくもと
のまゝにて因リテ作レル恨歌とよむべし。十九卷にも霍公鳥

怨恨歌とあり

ツキタツマデニは正しくいはば月立タムトスルマデニなり。

立夏をツキタツといへるにあらず

たまにぬくはなたちばなをともしみ思ソこのわがさとにきなか
すあるらし

霍公鳥者立夏之日來鳴必定、又越中風土希有橙橘也、因

是大伴宿禰家持感發於懷聊裁此歌三月二十九日

思は曾の誤ならむ○ホトトギスといふことを略せるは前の
歌に譲れるにてもあるべし○タマニヌクは玉ト貫クにて橘
の准枕辭としていへるなり。霍公が橘を玉にぬくにあらず
來鳴必定は來鳴クガ例ナリとなり。橙橘は橙と橘とにあらず。
タチバナをことさらに二字にていへるのみ。上(二〇頁)にも見
えたり

二上山賦一首 此山者有射水郡也

いみづがはいもきめぐれる（たましくしげ）ふたがみ山者へは
 るはなの さけるさかりに あきの葉の にほへるときに 出
 立て ふりさけ見ればかむからや そこばたふとき やまから
 や見がほしからむ すめがみの すそみのやまの しぶたにの
 さきのありそに あさなぎに よするしらなみ ゆふなぎに
 みちくるしほの いやましに たゆることなく いにしへゆ
 いまのをつつに かくしこそ 見るひとごとにかけてしぬば
 △米△
 普通の長歌なるを漢めかして賦といへるなり○二上山は俗
 に越中富士といふ。今の射水郡と氷見郡との界にあり。國府は
 その東麓にありて射水川の河口は更にその東を流れたり○
 有は在に改むべし

イユキのイは添辭なり。アキノ葉は紅葉なり。十卷(三二八頁)に
 はアキツ葉といへり○カムカラヤ云々は二卷(二〇一頁)に
 たまもよしさぬきの國は、國からか見れどもあかぬ、神から
 かここだたふとき

又六卷(一頁)に

みよし野のあきつの宮は、神からかたふとかるらむ、國から
 か見がほしからむ
 とあるを學べるなり。さてこのカムカラヤは山カラヤと共
 に山ガラニヤといふ意なり。ソコバはココダにひとし。俗語の
 タイサウなり。ミガホシはナツカシなり○スメ神は神の殊に
 貴きをいふ。こゝにては二上山をいへるなり。此山は二上神の
 即式内大社射水神社なり。此社は明治八年に同郡高岡に遷
 しき。但もとの社殿は分社として存せり

うしはき給ひし山なれば神の躰として山を直にスメ神といへるなり。スツミは麓なり。九卷(一〇六頁)にもツクパチノスツミノ田井とあり。〇澁谷は二上山の北麓にありて北海に臨める山なり。さてスメ神ノ以下八句はイヤマシニといはむ序なり。〇ヲツツはウツツなり。はやく五卷(四二頁)なる詠ニ鎮懐石歌に見えたり。イニシヘユイマノヲツツニは古ヨリ今ニ至ルマデなり。見ルヒトゴトニは此山ヲ見ル人毎ニなり。〇結句はシヌバメとありてはかなはず。シヌベといふべき處なれど言足らねばそを延べてシヌバ弊とぞいひたりけむ。そのシヌバへはメヅレなり。しぶたにのさきのありそによするなみいやしくしくにいにしへおもほゆ。上三句はシクシクニにかゝれる序なり。イニシヘオモホユは

古人の此處をめでし事なるべけれどいかなる故事にか今知るべからず

(たまくしげ)ふたがみやまに鳴鳥のこゑのこひしきときはきにけり

右三月三十日依興作之、大伴宿禰家持

ナク鳥といへるは霍公なる事前註にいへる如し

四月十六日夜裏遙聞霍公鳥喧述懐歌一首

(ぬばたまの)つきにむかひてほととぎすなくおとほるけしさとほみかも

右大伴宿禰家持作之

月ニムカヒテはただ月前ニといふことなり。二註に『月の出る方に向ひて』と釋せるは非なり。たとひ間近き聲なりともいづれの方に向ひて鳴くにか知るべきにあらず。〇オトは聲なり。

サトトホミカモはワガ居ル此里ガソノ處ヨリ遠ケレバニヤ
となり

大目秦忌寸八千島之館ニテ守大伴宿禰家持宴歌二首
奈吳のうみのおきつしらなみしくしくにおもほえむかもたち
わかれなば

初二は序、三四はシキリニシノバレムカとなり。此人の館より
は遙に奈吳の海の見えしにこそ。上にも此館にて主人のよめ
る奈吳ノアマノツリスルフネハといふ歌見えたり。○二註に
此歌を主人の作とせり。タチワカレナバといへる調を味はふ
に左註の示せる如く次の歌と共に家持の作なり
わがせこはたまにもがもな手にまきて見つつゆかむをおきて
いかばをし

右守大伴宿禰家持以正稅使須入京師、仍作此詩聊陳相

別之歎 四月二十日

イカバラシはイカバラシカラムを古格に従ひていへるなり
○國司より毎年朝廷に奉る所謂四度の使のうちなる正稅使
として上京せむとせるなり

遊覽布勢水海賦一首并短歌 此海者有射水郡フルエ江村也

ものふの やそどものをの おもふごち ころやらむと
うまなめて 宇知久知夫利乃 しらなみの ありそによする
しぶたにの さきたもとほり まつだえの ながはますぎて
うなびがは きよきせごごに うがはたち かゆきかくゆき
見つれども そこもあかにと 布勢のうみに ふねうけすゑて
おきべこぎ 邊にこぎ見れば なぎさには あぢむらさわぎ
しま末には こぬれはなさき ここばくも 見のさやけきか
(たまくしげ) ふたがみやまに はふつたの ちきはわかれず

ありがよひ いやとしのはに おもふごち かくしあそばむ
いまも見るごと

布勢水海は今、十二町瀉といひて氷見郡氷見町の西南にあり
(北國にては湖沼を瀉といふ)今は周一里餘に過ぎざれどもい
にしへは遙に廣かりしなり。舊江村は今のいづれの村々に當
れるか知られず。但十二町村の大字に古江新村あり。是舊江の
名のなごりなり。因にいふ。十二町瀉の西南に圓山といふあり。
其巔に御影神社ありて家持を祭れり。○有は在に改むべし。但
我邦の古書には通用せり
モノノフノヤントモノヲはモロモロノ官人なり。ココロヤラ
ムトは心ヲ慰メムトテなり。○宇知久知夫利乃を契沖は彼此
觸の意とせり。宇知牟禮來利の誤ならざるか。池主の和歌にオ
モフドチウマウチムレテとあり。九卷にも

馬なめてうち集こえ來けふ見つるよし野の川をいつかへ
りみむ

とあり。○サキタモトホリは岬ヲ徘徊シなり。○マツダ江ノ長
濱は今其處を失へり。ウナビガハは和名抄に射水郡宇納とあ
る處の川なるべし。○ウガハタチは鶺鴒を使ひて魚を取らしむ
るをいふ(一卷七三頁参照)古義にウナビガハ以下三句をカユ
キカクユキにかゝれる序とせるはいみじき誤なり。○カユキ
カクユキはアナタへ行キコナタへ行キなり。ソコモアカニト
はソレニモ飽カデなり。いにしへアカズをアカニともアカニ
トとも云ひしなり。○コヌレハナサキはコヌレニのニを略せ
るにてその花は藤花なるべし。ミノサヤケキカは見ル目ノオ
モシロキカナとなり。○タマクシゲ以下三句はユキハワカレ
ズの序なり。ユキハワカレズは互ニ行キ分ルル事ナクシテと

なり○アリガヨヒは此處ニ通ヒツツなり。イヤトシノハニは
今後モ毎年となり。今モのモは軽く添へたるなり。古義に『この
モの辭はゴトの下にめぐらして意得べし』といへるは非なり
○オモフドチといふ語の重出せるは心也かす
ふせのうみのおきつしらなみありがよひいやとしのはに見つ
つしぬばむ

右守大伴宿禰家持作之四月廿四日

オキツシラナミの下にヲを加へて聞くべし。略解に初二を序
としたるは非なり○シヌバムはメデムなり

敬和遊覽布勢水海賦一首并一絶

ふぢなみは さきてちりにき うのはなは いまぞさかりと
(あしひきの) やまにも野にも ほととぎす なきしとよめばう
ちなび久^キ ころもしぬに そこをしも うらごひしみと お

もふごち うまうちむれて たづさはり いでたちみればい
みづがは みなとのすざり あさなぎに かたにあさりし
ほみてば つまよびかはす ともしきに みつつすぎゆきし
ぶたにの ありそのさきに おきつなみ よせくるたまも か
たよりに かづらにつくり いもがため てにまきもちて (う
らぐはし) 布勢のみづうみに あまぶねに まかちか伊^キぬき
しろたへの そでふりかへし あごもひて わがこぎゆけば
乎布のさきは なちりまがひ なぎさには あしがもさわぎ
(さざれなみ) たちてもゐても こぎめぐり みれどもあかず
あきさらば もみぢのときに はるさらば はなのさかりに
かもかくも きみがまにま^ニ等^ニ かくしこそ みもあきらめ
たゆるひあらめや
一絶とは短歌を漢めかして云へるなり

を從來真カデトカイトヲ貫キと釋せり。案ずるにカイは添辭なり。そのカイは伎を伊とうつし誤れるにてもあるべく又はやくカキをカイと訛れるにてもあるべし。○袖フリカヘシは袖ヲヒルガヘシなり。○チリマガヒは散リ亂レなり。サザレナミはタチテモにかゝれる枕辭なり。さてタチテモ井テモはミレドモアカズにかゝれるにて立チテ見レドモ居テ見レドモといへるなり。○カモカクモはイヅレトモなり。マニマ等の等は爾の誤ならむ。元曆校本の傍書には爾とあり。以上二句の意は君ニツレラレテといへるなり。○ミモアキラメを略解に『見ハルカシなごよめるに同じ』といひ古義にも

見モシ明ラメモセメと云意なり。見は見めづる方にていひアキラメは心をはるかする方にて云り

といへり。案ずるにミアキラムは視察ミアキラムにて詳に見ることなら

む。二十卷なる家持の歌にも

時の花いやめづらしもかくしこそめしあきらめめ秋たつ
 ごとに

とあり。メシは見の敬語なり。○タユルヒといへるいぶかし。絶エム年といふべきをかく云へるか

しらなみのよせくるたまもよのあひだもつぎてみにこむきよ
 きはまびを

右掾大伴宿禰池主作 四月廿六日追和

古義に

本二句は海濱にありふる物を云てやがて序とせるにて契沖も云る如く玉藻の節ヨといひかけたるなるべし。十九にナピク珠藻ノ節ノ間モとあるにおなじつづけなり

といへり。○第三句は宣長の説に『世間モにて生涯モと云意な

イマゾサカリトは今ゾ盛ナルトのナルを略せるなり○ウチ
 ナビ久ココロモシヌニは十一卷(三〇六頁)なる
 うなばらのおきつなはのり打靡ウチナビキこころもしぬにおもほゆ
 るかも
 の打靡をウチナビキとよみしに倣ひて久を伎の誤とすべし。
 身モ打靡キ心モシナヒテとなり。さて此二句は次なるソコヲ
 シモウラゴヒシミトと對立せるにて共にオモフドチ云々に
 かゝれるなり。ウラゴヒシミトのトは例の如く除きて心得べ
 し○オモフドチウマウチムレテはオモフドチガ主格なれば
 馬ナメウチムレテとあるべきなり○タヅサハリはことにて
 は携手の原義にあらず。ただ一シヨニといふ意なり○スドリ
 は水禽なり。カタは滷なり。ツマヨビカハスは雌雄呼ビカハシ
 テタチヌとなり。此句にて切れたるなり○トモシキニはメヅ

ラシイガとなり○タマモは玉モにあらず。玉藻ヲなり。カタヨ
 リニは十卷(一二四頁)に
 片よりに絲をぞわがよる吾背兒之はなたちばなをぬかむ
 ともひて
 とあり。二すぢ合せてその一すぢにのみ搓をかくる事にや。古
 義に
 この一句は次句へつづかず。上のオキツナミの下に置かへ
 て意得べし。オキツ浪ノ片寄リニヨセ來ルソノ玉藻の意な
 ればなり
 といへるはいみじきひが言なり○イモガタメは奈良ナル妹
 ニ贈ラム爲なり○ウラグハシはウルハシにて布勢ノミヅウ
 ミにかゝれる准枕辭なり。枕辭なるが故にウラグハシキとい
 はでウラグハシといひても許さるゝなり○マカチカ伊ヌキ

り』といへり○ハマビは布勢湖の濱邊なり

四月二十六日掾大伴宿禰池主之館ユテ餞ニ税帳使守大伴宿禰家持ニ宴誼并古歌四首

(たまほこの)みちにいでたちわかれなば見ぬ日さ等まねみこひしけむかも

一云不見日久み戀しけむかも

右一首大伴宿禰家持作之

守サクワンより目まで尊卑に拘らず所謂四度の使に當りしはその公務を利用して京に歸らむ爲なるべし○四首とあるは都スミテ四首の意なるべけれど云々、詞三首并古歌一首とあらではまざら

はし
等は衍字なり。諸本に無し。サマネミは多サニなり
わがせこがくにへましなばほととぎすなかむさつきはさぶし

けむかも

右一首介内藏、忌寸繩磨作之

クニは故郷なり。サブシは不愉快なり
あれなしとなわびわがせこほととぎすなかむさつきはたまをぬかさね

右一首守大伴宿禰家持和

タマヲヌカサネは橋子ナドヲ絲ニ貫キテ藥玉ヲ作りテ心ヲヤリ給へとなり

石川朝臣水通橋歌一首

わがやどの花橋をはなごめにたまにぞあがぬくまたばくるしみ

右一首傳誦主人大伴宿禰池主云爾

水通を略解にミミチとよみ古義にミトホシとよめり。ミユキ

と訓せる本あり○家持の歌を聞きて此歌を思出でしなり
第三句以下を從來誤解せり。橘は實のまだいと小さきを絲に
貫きて遊びしなり。さて今は其時にならむが待遠なるにより
てまだ花の散らぬうちに花の心シ（雌蕊の子房）に絲をとほして
遊ぶといへるなり。タマニは玉トなり。マタバを古義に橘子ノ
アカラム時ヲ待タバと心得たるは誤れり

云爾は是也と同意ならむ。さらばゾとよむべし

守大伴宿禰家持館ニテ飲宴歌一首四月二十六日

みやこべにたつ日ちかづくあくまでにあひ見而ヲゆかなこふる
ひおほけむ

飽クバカリ君等ヲアヒ見テコソ行カメとなり

立山賦一首并短歌 此山者有ニ新河郡也

（あまざかる）ひなに名かかす こしのなか くぬちことごと

やまはしも しじにあれども かははしも さはにゆけども
すめがみの うしはきいます 爾比可波の その多知夜麻に
とこなつに ゆきふり之ヲきて おばせる 可多加比がはの き
よき瀬に あさよひごとニ たつきりの おもひすぎめや あ
りがよひ いやとしのはに よそのみも ふりさけ見つトよ
ろづよの かたらひぐさと いまだ見ぬ ひとにもつげむ お
どのみも 名のみもききて ともしふるがね

新河郡は歌に爾比可波とあればニヒカハとよむべし。和名抄
に爾布加波とあるははやく訛れるなり。さて新河郡は越中國
の東半を占めたる大郡にて今上中下の三郡に分れたり。多知
夜麻は今タテ山といふ。中新河郡にありて舊日本三山の一な
り。山上に式内雄山神社ありて伊弉諾尊を祭れり。國史に雄山、
神又新川神と見えたる是なり

名カカスを宣長は

カカスは懸スなり。人麻呂歌に御名ニカカセルアスカ川(○
二卷明日香皇女殯宮時作歌)とよめるも飛鳥皇女の御名に
かかせるなり。又紀の國の國懸神クニカカスをもおもふべし。こゝは立
山なれば立ツといふ事を名にかけて高くたてるよしなり
といひ雅澄は

カカスは懸賜フと云が如し。山を貴みてカケタマフと云意
に云るなり。さてこゝは立山と云名にかゝりて高く秀て立
登れるを云なるべし。夷と云に名をかくと云には非ず。夷國
にありて立山と云名にかゝりて高くたてる謂ならむ
といへり。カカスはげにカケ給フなり。但名カカスは名ヲカカ
スにて二卷なる御名ニカカセルアスカ河また十六卷なる妹
ガ名ニカカセル櫻とは同視すべからず。又名カカスはコシノ

中にかゝりてタチ山にはかからず。されば宣長雅澄の説はイハレ謂
なし。案するにヒナニ名カカスは鄙ニ名ヲ掲ゲ給フにて名ヲ
ツラ子給フといはむに齊しからむ。而してカクといはでカカ
スといへるは敬意を要せざる時も他の上にはいふ格なれど
下にも川の水の鏡に就くことを波比都奇ノカハノワタリ
瀬アブミツカスモといへり
こゝは國を神と尊びていへるにてなほ下に立山ノ帯ビタル
をオバセルといへる如し。○クヌチコトゴトは國中クニヂユウニなり。シ
ジニは繁クなり。ユケドモは流ルレドモなり。○スメ神は雄山、
神なり。ウシハクは領するなり。○トコナツニは此歌の反歌に
たちやまにふりおけるゆきを登己奈都爾みれどもあかず
かむからならし
又池主の和歌の反歌に

たちやまにふりおけるゆきの等許奈都爾けずてわたるは
 かむながらとぞ
 とあり。契沖は
 常ニと云心なり。撫子を常夏と云も春こそさかね秋もさき
 冬野にももしは咲ことあれば常磐の意なるべし
 といひ宣長は
 トコナツのナツはノドと通ひてのどかに久しき意也。草の
 トコナツといふ名も花ののどかに久しくあるよしの名也。
 ナデシコもノドシコにて同じ意也
 といへり。案するにトコナツニは恒夏ニなり。絶対の恒久にあ
 らで夏に限れる恒久なり。されば夏中^{デユウ}とうつすべし。ナデシコ
 を常夏といふも花の盛久しくして夏中さきつぐが故なり。○
 集中にフリシクといへるはフリ敷クにあらでフリ頻ルなり。

さて高山といへども夏中雪のふり頻る事はあらず。さればユ
 キフリ之キテとあるは誤字ならざるべからず。おそらくはフ
 リ於キテの誤ならむ。反歌にタチャマニフリオケルユキヲと
 あり池主の和歌にフユナツトワクコトモナク、シロタヘニユ
 キハフリオキテとありその反歌にタチャマニフリオケルユ
 キノとある、傍證とすべし。○カタカヒガハは今片貝川と書く
 なり。立山より發して下新川郡を貫きて北海に注げり。さて片
 貝川を序につかへるを見れば此歌は立山を北方より望みて
 よめるなり。○タツキリノオモヒスギメヤの語例は三卷(一)○
 三頁)なる赤人の歌に
 あすか河かはよごさらずたつ霧のおもひすぐべき戀にあ
 らなくに
 とあり。オモヒスギメヤは忘レムヤといふに近し。○さてオバ

セル以下五句はオモヒスギメヤにかゝれる序なれば之を除
き見るに

新川のその立山はとこなつに雪ふりおきて、おもひ過
ぎめや

となりて辭のつづきよろしからず。もとよりかゝりしにや○
アリガヨヒイヤトシノハニは布勢水海賦にも見えたり。同辭

の重出は此作者の特徴の一なり。さてヨソノミモフリサケ見
ツツといへるを見れば立山に登りしにはあらざるなり○オ

トノミモ名ノミモは音ニノミモ名ニノミモトニを挿みて聞
くべし。オトは噂なり。トモシブルはユカシガルなり。略解にメ

ヅラシガルとし古義にウラヤマシガルとせる共に非なり。ガ
ネはベクなり

たちやまにふりおけるゆきをどこなつに見れどもあかずかむ

からならし

古義に立山ニトコシヘニフリオケル雪ヲ見レドモ見アカズ
と譯したり。トコナツニをトコシヘニの意とすともトコナツ

ニは見レドモにかゝれるをフリオケルの上に移して譯すべ
きかは○古義に又カミカラとはいふべくカムカラとは云ふ

べからずといひて奈を補ひてカムナガラナラシとせり。カミ
カラをカムカラといへるは轉訛のみ。さてカムカラナラシは

山ガラニヤとなり
かたかひのかはの瀬きよくゆくみづのたゆることなくありが

よひ見む
四月二十七日大伴宿禰家持作之

上三句は序なり

敬和立山賦一首并二絶

あさひさしそがひに見ゆるかむながらみなにおはせる
 しらくものちへをおしわけあまそそりたかきたちやま
 ふゆなつとわくこどもなくしろたへにゆきはふりおきて
 いにしへもありきにければこごしかもいはのかむさび
 (たまきはる)いく代經にけむたちてゐて見れどもあやし
 みねたかみにたにをふかみとおちたぎつきよさかふちに
 あささらすきりたちわたりゆふさればくもゐたなび吉
 くもゐなすこころもしぬにたつきりのおもひすぐさず
 ゆくみづのおともさやけ久よろづよにいひつぎゆかむ
 かはしたえずば

アサヒサシソガヒニ見ユルを略解に

朝日サシは常見やる所より朝日のさすに向ひて見ゆる方
 也。ソガヒニミユルは府より背向に見ゆる也

といひ古義に

アサヒサシはソガヒニミユルといはむとての枕詞におけ
 るなるべし。すべて朝日のさす方にはまばゆくて直に向ひ
 難きものなればかくつづけたるなるべし。ソガヒニミユル
 は國府の方より背向に見ゆるを云なるべし

といへる共に非なり。背面ニ朝日ノサシテ見ユルといふべき
 を前後にいへるなり。二註の著者が立山を國府より背面に見
 ゆるやうに思へるは誤れり。國府の背面に見ゆるは二上山な
 り。立山は國府の東南十數里の空に聳えたり。さてアサ日サシ
 ソガヒニ見ユルの二句はタチ山にかゝれるなり。○カムナガ
 ラ以下四句を略解に

カムナガラは山をやがて神とせり。ミナニオハセルは立と
 名に負たるは天と高く聳立る故に山の名に負たりといふ

也
 といひ古義に
 此山の高く秀て天にそそり立るゆゑに立山と御名に負せ
 たまへるといふなるべし。シラクモノは高く秀たる形容を
 いへり
 といへり。案するにまづカムナガラは所謂神的にて立山を神
 としていへるなり。さてカムナガラは御名ニ負ハセルにかゝ
 れるなり。次に御名ニ負ハセルは語格上シラ雲にかゝれるな
 れば立山ト御名ニオハセルといふ意とは見るべからず。おそ
 らくは立山の別名を(又は立山の一峯の名を)白雲山とぞいひ
 けむ。千ヘヲオシワケは千重ニカサナレルヲ押分ケテとなり
 ○アマソソリは天に進み上る事なり。アリキニケレバは在來
 リケレバなり○コゴシカモは三卷(九二頁)にもコゴシカモ伊

豫ノタカ子ノとあり。コゴシキカモの古格にてこゝにては岩
 にかゝれり。カムサビはモノフリなり○タマキハルは代にか
 られる枕辭なり。十一卷(四一頁)にもタマキハル世ノハテマデ
 トとあり○タチテ井テ云々は立チテ見レドモ居テ見レドモ
 アヤシとなり。布勢水海賦の和にもタチテモ井テモコギメグ
 リ見レドモアカズとあり○タニヲフカミトのトは例の如く
 除きて見べし○オチタギツキヨキカフチニは無理なる辭な
 り。カフチは河の周れる地にておちたぎつものにあらねばな
 り。宜しくオチタギツタキノカフチなどいふべし○クモ井
 タナビ吉のクモ井はやがて雲なり(十一卷八〇頁参照)吉は久
 の誤ならむ。まづキリタチワタリ、雲井タナビクといひてそを
 クモ井ナス、タツキリノと枕辭につかへるにて古歌の格に依
 れるなり。さてクモキナスココロモシヌニは雲ノ靡ク如ク心

モ靡キといへるにてオモヒスグサズは忘レズといへるなり
○ユク水ノオトモサヤケ久の二句は無くもがな。強ひて之を
存せばサヤケ之といふべし。オトモサヤケクヨロヅヨニイヒ
ツギユカムとはつづくべからざればなり。○カハシタエズバ
は河ノ絶エザラム限ハとなり。ミヲシタエズバの類なり
たちやまにふりおけるゆきのことなつにけすてわたるはかむ
ながらとぞ

家持の

たち山にふりおける雪をどこなつに見れどもあかずかむ
からならし
といふ歌の辭をすこし更へて和としたるなり。○ワタルハは
アルハなり。カムナガラトゾの下にはオモホユルを略せるな
り。略解には聞傳フルを補ひ古義にはトゾをトラゾとせり。前

者は従はれず。後者は適に誤れり。さてこゝは山ガラトゾオボ
ユルといふべき處なれば家持の歌の如くカムカラといふべ
くカムナガラとはいふべからず
おちたぎつ可多加比がはのたえぬごといま見るひともやます
かよはむ

右掾大伴宿禰池主和之

今ミル人とは家持を指せるにて所詮家持を祝せるなり

入京漸近悲情難撥述懷一首并一絶

(かきかぞふ) ふたがみやまにかむさびて たてるつがのき
もともえもおやじときはに はしきよし わがせのきみを
あささらす あひ底ことごとひ ゆふされば 手たづさはりて
いみづがは きよきかふちに いでたちて わが多ちみれば
あゆのかせ いたくしふけば みなとには しらなみたかみ

つまよぶと すぐり波さわぐ あしかると あまのをぶねは
 いらえこぐ かぢのおとたかし そこをしも あやにともしみ
 しぬびつつ あそぶさかりを すめろぎの をすくになれば
 みこともち たちわかれば おくれたる きみはあれども
 (たまほこの) みちもくわれは しらくもの たなびくやまを
 いはねふみ こえへなりなば こひしけく けのながけむぞ
 そこもへば ころしいたし ほととぎす こゑにあへぬく
 たまにもが 手にまきもちて あさよひに 見つつもかむを
 おきていかばをし

初六句は本家なる作者も分家なる池主も共に壯健なるをた
 とへ云へるなり。モトモエモは幹モ枝モなり。トキハニのニは
 ニテと心得べきか。○ワガセノキミは池主なり。アササラズは
 毎旦なり。君ヲといひてアヒテコトドヒとはいふべからず。底

は見の誤にあらざるか。○イデタチテワガタチミレバといへ
 る、タチといふ言かさなれり。多知彌禮婆の多は宇の誤ならむ
 か。○アユのカゼは東風の方言なる由下に見えたり。古義に
 毛詩に習々^{ヤハラカナル}谷風^{アユノカゼ}云々注に谷風、東風也とあり。この谷風をア
 ユノカゼとむかしの博士の訓るを思へば越俗より出て京
 人などもしかいへるにや

といへり。今土人は東北の風をアイノカゼといふ。アイはアユ
 の訛なる事疑なし。さればアユのカゼは正しくは東北風をい
 ひしかと思ふに因伯にては東風をアユといひ羽後にては北
 風をアイといふとぞ。なほ他國の人に問ひ試みてむ。○スドリ
 ハといへる、打見にはアマノヲブネハと相對したる如くなれ
 ど實はミナト即灣口とイリエ即灣内とをむかはせたるなれ
 ばスドリの下にハを添ふるに及ばず。其上にミナトニハとい

ひて更にスドリハと云はむは調よろしからねばスドリ波の
 波は曾の誤とすべし○アシカルト云々の四句はもし五七調
 に拘はらずば又入江ニハ[△]蘆荊ルトアマノ小舟ヲ漕グ楫ノ音
 高シといふべきなり○ソコヲシモ云々は之ヲシモイタクメ
 ズラシガリメデツツ遊ブ最中ニとなり○ヲスクニは御領内
 にてやがて王土なり。ミコトモチは御用ヲ帶ビテなり○タチ
 ワカレナバの照應なし。又タチワカレナバといひ更にコエヘ
 ナリナバとはいふべからず。もしシラクモノタナビク山ヲイ
 ハチフミコエヘナリナバの四句を削らば語格はとくのふべ
 きなり○君ハアレドモは君ハトモカクなり。例は二卷(一〇頁)
 にアケテユカバ君ガ名ハアレド吾名シヲシモとあり○十卷
 (二七一頁)に
 こひしけくけながきものをあふべかるよひだに君が來ま

さざるらむ

とあり。コヒシケクは戀シキ事、ケナガシは久シなり。家持が上
 なる哀傷長逝之弟歌(六四頁)にコヒシケクケナガキモノヲと
 いへるは右の歌に依れるにて難なけれど此處の如くコヒシ
 ケクケノナガケムゾとはいふべからず。ケナガシと云はでケ
 ノナガシといへばケといふ語(ケは日數なり)主格となりて一
 文の中にコヒシケクと二つの主格を生ずればなり。さればこ
 こはケナガカラムゾとあるべきなり○ホトトギス以下は君
 ハ霍公鳥ノ聲ニ交^アへ貫^スク玉ナレカシといへるにて八卷(四三
 頁)に

ほととぎすいたくななきそながこゑを五月の玉にあへぬ
 くまでに

とあるに依れるにて玉といへるは橋子なるべし○タマニモ

ガ以下は此月二十日に同じ人の秦八千島の館にてよみし
 わがせこはたまにもがもな手にまきて見つつゆかむをお
 きていかばをし
 と例の同辭重出なり
 わがせこはたまにもがもなほどとぎすこゑにあへぬき手にま
 きてゆかむ

右大伴宿禰家持贈_二掾大伴宿禰池主_一四月卅日

忽見_二入_レ京_ル述_レ懷_レ之作_一、生別悲兮、斷腸萬回、怨緒難_レ禁、聊奉_二所心_一

一首并二絶

(あをによし) 奈良をきはなれ (あまざかる) ひなにはあれど
 わがせこを 見つつしをれば おもひやる こともありしを
 おほきみの みことかしこみ をすくにの こととりもちて
 (わかくさの) あゆひたづくり (むらどりの) あさだちいなば

おくれたる あれやかなしき たびにゆく きみかもこひむ
 おもふそら やすくあらねば なげかくを とごめもかねて
 見和多勢婆_{ミタタシシバ} うのはなやまの ほととぎす ねのみしなかゆ
 (あさぎりの) みだるゝころろ ことにいでて いはばゆゆしみ
 どなみやま たむけのかみに ぬさまつり あがこひのまく
 はしけやし きみがただかを まさきくも ありたもとほり
 つきたらば ときもかはさず なでしこが はなのさかりに
 あひ見しめとぞ

所心は所感なり(此卷一頁及七二頁参照)

ヒナニハアレドは鄙ニハ居レドなり。オモヒヤルは心ヲ慰ム
 ルなり。コトトリモチテは御用ヲ帶ビテにて贈歌のミコトモ
 チにおなじ○アユヒタヅクリは皇極天皇紀なる蘇我蝦夷の
 やまとの、おしのひろせをわたらむとあよひたづくりこし

つくらふも
 を學べるなり。そのアユヒは雄略天皇紀に脚帶とあれば褰げ
 たる禪ハカマを結ぶ紐とおもはる。タヅクリは眞淵のいへる如く手
 して作る事なり。さてワカクサノを古義に枕辭とせり。次なる
 ムラトリノアサダチイナバと對照するにげに枕辭なるべけ
 れどいかに加かれるにか知られず。古義には『アユフとかよれ
 るなり』といへれどアユフといふ語は聞き知らず。○アレヤカ
 ナシキは正しくは我ヤ悲シカラムといふべし。ナゲカクはナ
 ゲクの延言にてこゝにては嘆といはむにおなじ。○トドメモ
 カネテはネノミシナカユにかかれるなり。さればミワタセバ
 といふ辭漂ひて著く處なし。ミワタセバはおそらくはミワタ
 シノの誤ならむ。さらばそのミワタシノ以下三句はネにかゝ
 れる序とすべし。○イハバユユシミは云ハバ忌ユ々ユシカルベミ

なり。○トナミ山は越中と越前(後の加賀)との界にありて北國
 より京に上る官道に當れり。所謂俱利伽羅峠なり。タムケは即
 峠なり。三代實錄に越中國手向神とあるはやがて此礪波の峠
 の神なり。○コヒノマクは乞ヒ祈ルヤウハとなり。タダカは近
 くは十三卷(一二四頁及一四三頁)に見えたり。キミガタダカラ
 は君ソノ人ヲといはむが如し。○アリタモトホリは在リ巡リ
 にて正しくいはばアリタモトホラセテといふべし。○トキモ
 カハサズは時モ移サズなり。アヒミシメトゾの下にコヒノム
 といふことを補ひて聞くべし。此句は三卷(六六頁)に
 佐保すぎてならのたむけにおく幣は妹を目かれずあひ見
 しめとぞ

とあるを學べるなり

(たまほこの)みちのかみたちまひはせむあがおもふきみをなつ

かしみせよ

マヒハセムははやく五卷(一五七頁)六卷(八六頁)九卷(一〇一頁)に見えたり。マヒは贈物なり。ナツカシミセヨは親愛セヨにてイタハレといはむに近し。○一首の趣上なる坂上郎女のみちのなかくにつ御神はたびゆきもししらぬ君をめぐみたまはなと相似たり
うらごひしわがせのきみはなでしこがはなにもがもなあさな
さな見む

右大伴宿禰池主報贈和歌五月二日

ウラゴヒシハ心ニコヒシキノニトキトを略して准枕辭としたるなり

思放逸鷹夢見感悦作歌一首并短歌

大王の とほのみかぞ曾み雪落 越と△名におへる (あまざかる) ひなにしあれば 山高み 河とほじろし野をひろみく
さこそしげき あゆはしる なつのさかり等 (しまつとり) 鵜
養がともは ゆくかはの きよき瀬ごとに かがりさし なづ
さひのぼる (露霜の) あきにいたれば 野毛さはに とりすだ
けりと ますらをの ともいざなひて たかはしも あまたあ
れども 矢形尾の あが大黒に〔大黒者蒼鷹之名也〕しらぬりの
鈴とりつけて 朝獺に いほつとりたて 暮獺に ちどりふみ
たて おふごとに ゆるすことなく 手放も をちも可やすき
これをおきて またはありがたし さならべる たかはなけむ
と 情には おもひほこりて ゑまひつつ わたるあひだに
たぶれたる しこつおきなのことだにも 吾にはつげずと
のぐもり あめのふる日を とがりすと 名のみをのりて △

三島野を そがひに見つつ 二上、山とびこえて くもがくり
 かけりいにきと かへりきて しはぶ禮つぐれ をくよしの
 そこになければ いふすべの たごきをしらに 心には 火さ
 へもえつつ おもひこひ いきづきあまり けだしくも あふ
 ことありやと あしひきの をてもこのもに となみはり も
 りべをすゑて (ちはやぶる) 神社に てる鏡 しづにとりそへ
 こひのみて あがまつときに をとめらが いめにつぐらく
 ながこふる そのほつたかは 麻都太要の はまゆきくらし
 つなしとる 比美の江過て 多古のしま とびたもとほり あ
 しがもの すだく舊江に をとつ日も きのふもありつ ちか
 くあらば いまふつかだみ とほくあらば なぬかのうちは
 すぎめやも きなむわがせこ ねもころに なこひそよとぞ
 い麻につげつる

トホノミカドは地方の政廳なり。古義に三卷なる大王ノトホ
 ノミカドト以下あまたの例を擧げてミカド曾の曾を等の誤
 とせり。案ずるに初二句はココハ天皇ノ遠ノ朝廷ゾといへる
 なればもとのまゝにて可なり。但その下にサレドといふこと
 を補ひて心得べし。○其次の二句はミユキハル越トイフ名ニ
 カナヒテゲニ雪深キといふ意と聞ゆれば越トフ名ニオヘル
 とあらざるべからず。されば越登の下に布をおとせるなり。○
 トホジロシは偉大ナリとなり。以上二句は三卷(九八頁)なる赤
 人の長歌に依れるなり。○草コソシゲケレといふべきをシゲ
 キといへるは古格に従へるなり。○ナツノサカリ等は爾とあ
 るべし。ナヅサヒはこゝにては水中をゆき煩らふさまなり。○
 ツユジモノはオクといふことを略したるにてシラ浪ノ濱松
 ガエなどと同格なる枕辭なり。○野毛サハニの毛は弁などの

誤とせざるべからず。スダケリは集レリなり。マストラヲノトモ
 イザナヒテは丈夫ノ侶ヲ我誘ヒテとなり。○アマタアレドモ
 は世ニ多カレドといへるにあらず。我館ニアマタ飼ヒタレド
 となり。○矢形尾を略解に
 矢は借字にて屋形なるべし。屋の棟の如くイロハがなのへ
 の字の形せる斑文あるをいふならんと翁(○真淵)はいはれ
 き
 といへれど借字には專字音を用ふるが此卷の書式なれば矢
 形と書けるは借字にはあらず。○シラヌリノ鈴は略解に『銀砂
 焼付たるなるべし』といへれどやき附けたるをヌリとはいは
 じ。銹ごめに白漆を塗りたるにあらざるか。○獺は我邦にて獵
 に通用せし字なり。タテは起^タタセにてフミタテを略せるなり。
 チドリフミタテの下に獵スルニソノ鷹ハといふことを補ひ

て心得べし。ユルスはトリニガスなり。○タバナレは拳を離る
 る事にてヲチは拳にかへる事なり。古義にタバナシとよむべ
 きかど云へるは非なり。さて契沖以下ヲチモ可ヤスキの可を
 ヤスキに添へる辭としたるは誤れり。カヤスキと心得てコレ
 ヲオキテに續くべきにあらず。可は曾の誤にてヤスキにて切
 れたるなり。○サナラベルのサは略解にいへる如く添辭なり。
 古義にサシナラベルの略としたるはひが言なり。サシを略し
 てサといふべからず。○ココロニハのハには意なし。ワタル
 はアリ經ルなり。○タブレタルはタハケタルなり。シコツオキ
 ナは鷹飼山田君鷹を言りていへるなり。○コトダニモ吾ニハ
 ツゲズは吾ニハ何モ云ハズなり。トガリスト名ノミヲノリテ
 は山田君鷹デゴザル、鳥狩ニマ井ルトノミ門番ニコトワリテ
 といふ意なるべし。○名ノミヲノリテの下に大黒ヲツレテ出

タガといふ意の二句あるべきなり。○三島野は和名抄に射水郡三島とあり。今の二口村附近なりといふ。案するに今少し國府に近かるべくおぼゆ。なほ十八卷にいふべし。○シハブ禮の禮は伎の誤ならむ。ツグレは告グルニなり。○ヲクヨシは招キ呼ブスベなり。ソコはココなり。イフスベノタドキヲシラニは云フスベヲ知ラズなり。十五卷(一三一頁)にもスルスベノタドキヲシラニとあり。○火サヘモエツツは噴志の焔の燃ゆるなり。イキヅキアマリは長息ナグキシ足ラズなり。はやく七卷(二七六頁)に見えたり。ケダシクモは或ハなり。アフコトは見附クル事なり。○アシヒキは山といはむ代にいへるなり。ヲテモコノモはカノモコノモなり。はやく十四卷(二二頁)に見えたり。おそらくは雅言ならじ。モリベは番人なり。○テルカガミは明鏡なり。シヅは倭文布なり。コヒノミテは乞ヒ祈リテなり。○ヲトメラの

ラは無意の助辭なり。ここにては無論一人の處女なり。○ホツタカはすぐれたる鷹なり。マツダ江は上なる布勢水海賦にもマツダエノナガハマスギテとあり。○ツナシはコノシロの類なり。ヒミノエは氷見江なり。舊江とおなじく布勢湖の入江ならむ。又多古ノシマは多祢浦の附近にありし島ならむ。○チカクアラバ以下四句は十三卷(一六二頁)なる長歌に久ナラバ今七日バカリ、早カラバ今二日バカリ、アラムトゾ君ハキコシシとあるに依れるなり。○ダミはタミにてメグリなり。コギタミユケバなどのタミなり。八重山島の民謠に五日毎をイチカマアリ(五日廻)といへるを思へばフツカダミは二日目なり。○スギメヤモは上に付き、來ナムワガセコは下に附きて五七調の七五調にかはるべき兆を示せり。注目すべし。上(一五〇頁)なるホトトギス聲ニアヘヌク、玉ニモガ手ニマキモチテ、アサヨヒ

ニ見ツツユカムヲの玉ニモガ手ニマキモチテも然り○ナコ
ヒソにヨを添へたるめづらし。麻は真淵のいへる如く米の誤
ならむ

矢形尾のたかを手にするみしま野にからぬ日まねくつきぞへ
にける

カラヌ日は獵セヌ日、マネクは多クなり
二上のをてもこのもにあみさしてあがまつたかをいめにつげ
つも

タカヲは鷹ノ事ヲなり
まつがへりしひにてあれかもさやまだのをちが其日にもどめ
あはずけむ

九卷(一四七頁)に

まつがへりしひてあれや羽みつぐりの中上こぬ麻呂等言

八子

といふ歌あり。今の歌の初二は之に倣へるなり。マツガヘリは
古義にいへる如く枕辭なるべし。シヒニテアレカモのモは助
辭、アレカはアレバニヤにてシヒニテアレカモは鷹ガスネテ
アレバニヤといふことならむか○サヤマダノヲヂは山田の
老人にて氏にサを添へたるは地名の檜隈にサを添へてサヒ
ノクマといへるが如し。其日は鷹ヲソラシシ日なり。モトメア
ハズケムは尋ネ逢ハザリケムなり
情にはゆるぶことなくすがのやますがなくのみやこひわたり
なむ

右射水郡古江村取獲蒼鷹、形容美麗鷲雉秀群也、於時養
吏山田史君鷹調試失節野獵乖候、搏風之翅高翔匿雲腐
鼠之餌呼留靡驗、於是張設羅網窺乎非常、奉幣神祇特乎

不虞也、^奥以^ニ夢裏^ニ有^ニ娘子^ニ喻^レ曰、使君勿^下作^ニ苦念^ニ空費^中精神^上、放
逸彼鷹獲得未^レ幾矣哉、須臾覺寤有^レ悦^ニ於懷、因作^ニ却^レ恨^ニ之歌^一
式^{モチテ}旌^ニ感信^ニ、守大伴宿禰家持九月二十六日作也

ココロニハを古義に『求^{コト}る事業^{ワケ}にはつづきては得堪ざれども
中情には云々』と釋せり○須加ノヤマを古義に

源平盛衰記三十に越中國に須^ス川^カ山と云あり。是なるべし

といひ萬葉越路の榮といふ書には

此山は礪波郡今宮島村字須^ス川^カの山なるべし。古義には源平

盛衰記の俱利加羅の役に須^ス川^カ林に云々とある所なりと見

えたれども本集本歌の須^ス川^カ山とは全然異處なり。思ひまが

ふべからず

といへり○スガナクを古義に

字鏡に嘻囉、心中不悅樂貌、坐歎貌、須加奈加留、催馬樂蘆垣に

菅ノ根ノスガナキコトヲワレハキクカナこれらを考合て

其意をささるべし

といへり。オモシロカラズといふ意なるべし

調試はこゝにては鷹を馴す事なり。調馴ともいふ。節は加減な

り。候ニ乖クは雨の降る日に使ひしを云へるなり○腐鼠之餌

は鷹の好む餌にて此八言は歌にヲクヨシノソコニナケレバ

といへるに當れるなり。二註に『小鳥の好めるものなればかへ

り見もせぬ也』といへるはいみじき誤なり○於是張^ニ設羅網^一以

下十九言は歌のケダシクモアフコトアリヤト、アシヒキノヲ

テモコノモニ、トナミハリモリベヲスエテ、チハヤブル神ノヤ

シロニ、テル鏡シヅニトリソヘ、コヒノミテワガマツトキニに

當れり。就中非常不虞はケダシクモアフコトアリヤに當りて

萬一といふことなり。特は二註にいへる如く特の誤なり。奥も

粵の誤なり。○使君は勅使の敬稱なり。家持は國守なればかく云へるなり。苦念の苦は切實なり。情神は精神に作れる本あり。但集中に情神と書きてココロドとよませたる例少からず。○未幾矣哉は程ナカラムとなり。却是卻の俗字にてシリゾクルなり。感信を二註に『さまさまに心を盡せししるしのあること』と釋せるはいかが。感は感應、信は靈驗にて神に祈りし驗あるをいへるならむ。

池主よりアヲニヨシといふ歌を贈られし五月二日より後に京に上り此歌を作りし九月二十六日より前に任に歸りしなり。さて京にて作りし歌は別にぞ記したりけむ。

高市、連黑人、詠一首、年月不審。

賣比の野のすゝきおしなべふるゆきにやごかるけふしかなしくおも倍ハ也

右傳誦此誦三國真人五百國是也

メヒは越中の郡名なり。和名抄に婦負と書きて禰比と訓せるはメヒのネヒにうつりしなり。マ行のナ行にうつれるは例多し。

中ごろ姉負とも書きしは字を訓に適せしめしなり。今はもこの如く婦負と書きて子イと唱ふといふ

○結句の倍を契沖以下保の誤とせり。もこのまゝにてオモハユとよむべし。倍の音ハイを略してハに借れるなり。

左註の此の下の誦は諸本に歌とあり

○

東風アノカゼ越俗語東風謂之安由乃可是也イタクふくらし奈吳のあまのつりするをぶねこぎかくる見ゆ

アユノカゼの事ははやく上一五一頁にいへり。○結句は後世

ならばコギカクルル見ユといふべきなり
みなとかせさむくふくらし奈吳の江につまよびかはしたづさ
はになく

一云たづさわぐなり

奈吳の江は即放生津瀉なり

(あまざかる)ひなともしるくここたくもしげきこひかもなぐる
日もなく

ヒナトモのモは軽く添へたるなり。又ヒナトモシルクはナグ
ル日モナクにかゝれるなり。ナグルはナゴムなり

こしのうみの信濃シチノ(濱名也)のはまをゆきくらしながきはるびも
わすれてもへや

右四首天平二十年春正月二十九日大伴宿禰家持
コシノウミは北海なり。地方誌どもに放生津瀉の古名とせる

は従はれず。信濃濱は今所在を失へり。ワスレテモヘヤは妹ノ
事ヲ忘レムヤハとなり○三四のつづきたどたどし。ワタツミ
ノトヨハタ雲ニ入日サシなどと同格なりとも認められず。古
義には行廻リ日ヲ暮セレド長キ日スガラ京ノ事ヲ得忘レム
ヤハと譯したれどユキクラシとあるをユキクラセレドとは
譯すべからず。又正月二十九日をナガキ春日といはむも穩な
らず。もしナガキをアソブと改めなばよくとのふべし
契沖雅澄は左註の天平二十年を二十一年の誤とせり。今此卷
并に次の卷に見えたる年月日を拾ひ集めむに

天平十八年七月

赴任

八月七日

九月廿五日

十一月

同 十九年二月廿日

同 二十年二月廿九日(一)

姑洗二日

三月三日

三月四日

三月五日

三月廿日

三月廿九日

三月三十日

四月二十日

四月廿四日

四月廿六日

四月廿七日

四月廿八日

四月三十日

五月二日

九月廿六日

二十年正月廿九日(二)

二十年三月廿三日(三)

廿五日

廿六日

四月一日

二月二日

三月十五日

三月十六日

四月(四)四日

此歌

以下十八卷

入京渐近

天平感寶元年五月五日

四月十四日改元

契沖雅澄は二及三を二十一年の誤とし千蔭は一を十九年の誤とせるなり。千蔭の説に従ふべし。くはしくは上(八〇頁)に云へり。因にいふ。十八卷なる四月二日と三月十五日との間には二十年四月三日より二十一年三月十四日までの歌をおとせるなり

礪波郡雄神河邊作歌一首

をがみがはくれなるにほふをとめらし葦附〔水松之類〕とると湍にたたすらし

雄神川は今庄川といふ。もと小矢部川と合して射水川となりしが近年河身の改修によりて小矢部川とは別流となりき。○クレナ井ニホフは紅ニ匂フのニを略したるにて此句にて切れたるなり。○アシヅキは淡水に生ずる一種のノリにて水中

の石又は葦の根に附著して生ずるが故に葦附といふなり。庄川には今は狭き區域にのみ之を産すれど近江國などには之を産する處少からずといふ。○此歌は七卷(一二四頁)なる黒牛の海くれなるにほふももしきの大宮人しあさりすらしも

を學びたるなり

婦負郡渡嶋坂河邊時作歌一首

うさかがはわたる瀬おほみ許乃あが馬のあがきのみづにきぬぬれにけり

題辭の邊は衍字ならむ

嶋坂川は婦負川即今の神通川の上流なり。ワタル瀬オホミといへるは川の流の廻れる爲同じ川を二たび三たび渡りし故に云へるならむ。○三句の許乃は不用なり。衍字にあらざるか

見^{カフナル}潜^レ鷗^ル人^ニ作歌一首

賣^ビ比^ヒがはのはやき瀬ごとにかがりさしやそどものをはうがは
たちけり

ヤソトモノヲとあれば平民にはあらず。古義には『下司家令な
ごを云べし』といへれどこは家持に見すべく郡司などの鶴が
ひを催ししならむ(家令といへるは家隸の意にや。國守に家令
はおふけなし)

新河郡渡^{ハヒツキ}延^{ツキ}槻河^ニ時作歌一首

たちやまのゆき之^トくらしもはひつきのかはのわたり瀬あぶみ
つかすも

ハヒツキ川は立山より發して今の中新川郡と下新川郡との
間を流れたり。今、早月川といふ
略解に

ユキシクラシモは例のシクシクの意にては解がたし。宣長
云。雪シのシは助辭にてクラシモは消ラシモ也。消ルをクと
いふはめづらしけれども書紀に居をウとよむ註もあり又
乾をフとよむ註もあれば消は古言にクといへるなるべし
といへり。もしキユをクといへるならば古言とせずして異常
なる約言とし寧俗語とすべけれど(十四卷一九七頁参照)ユキ
シクラシモはユキト^ククラシモの誤にあらざるか○アブミツ
カスモは鏡ニ就カスモのニをはぶけるなり。七卷(二七三頁)な
るヒロセ川袖ツクバカリ淺キヲヤのツクにおなじ(これも袖
ニツクのニをはぶけるなり。水ガといふことは略せるなり。ツ
カスは必しも敬語にあらず。此格は己が上にこそ用ひね他の
上には敬意を要せざる場合にも用ひたる例あり
以上四首は國府より發して南及東の方なる礪^{ナミ}波^ミ、婦^{ヒメ}負^ネ、新^{ニヒ}河^{カハ}の

三郡を巡行せし途の歌なり。それより一たび國府に歸りて更に西北なる能登の諸郡を巡行せしなり。

赴^ニ參^ム氣比大神宮^ハ行^ニ海邊^ニ之時^ニ作歌一首

之乎路^ヲからただこえくればはぐひの海あさなぎしたり船楫も

がも
氣比は契沖のいへる如く氣多の誤字なり。氣多大神宮は能登國の一宮にて羽咋郡にあり。能登は元正天皇の御代に越前より割きて置かれ此聖武天皇の御代に越中に併せられ稱徳天皇の御代に再分ち立てられしなり。海邊とあるは能登の西海岸なり。羽咋郡は射水郡の西に隣れり。之乎路は之乎山の路なり。古義に古今集なるシホノ山サシデノイソニナクチドリ^ノシホをシヲとしてこれと同處とせるは誤れり。シホノ山は甲斐國にあり。さて射水郡(今の氷見郡)より之乎山を越えて羽咋

郡に入立つなり。それより之乎(今志雄と書く)を経て西海岸に出で北上すれば氣多に到るなり。今の歌はその海岸にてよめるなり。○海のなぎたるを見て船を獲て海に浮び遊ばむと願へるなり

能登郡從^ニ香島津^ニ發^レ船^ヲ行^ニ於^テ射^ニ熊來村^ニ往^ニ時^ニ作歌二首

とぶさたて船木さるとい有能登の島山、今日見者^{シレバ}こだちしげし

もいく代神備會

能登郡は後の鹿島郡なり。○行於は古義に従ひて衍字とすべし。此二字無き本多し。發は訓讀せむとならばヒラキとよむべし。アサビラキのヒラキなり。射はサシテとよむべし。十六卷(一二八頁)にも

自^ニ肥前國松浦縣美禰良久埼^ニ發^レ船^ヲ直^ニ射^ニ對馬^ニ渡^ニ海

とあり

因にいふ。美禰良久の禰を宣長の説に従ひて彌の誤とせしはわろし。關政方の備字例(五丁)及義門の男信(中卷一丁)に云へる如くもとのまゝにてミネラクとよむべし

○香島津は所謂南灣の内にて今の七尾町附近ならむ。熊來は今も熊木村ありて西灣に臨めり。七尾町よりは西北に當れり
○氣多より路を東北に取りて東海岸に出でさて香島津にて乗船せしなり

トブサタテの語例は三卷(一六七頁)にトブサタテ足柄山ニフナ木キリとあり。村田春海の織錦舎隨筆卷之上(百家説林續篇上五三二頁)に

下總國海上のあたりにて山松をきるとき千本が中に一木ふた木ばかりを残しおくをトホサキといふ。それは山の神に手むくるなりとぞ。又里人の門松ぬき捨たる跡に梢を短

くきりてたておくをもとよりトホサキといふといへり。冠辭考に遠江國の詞に木の最末をトホサキといひ越前土佐などにてもしかいふ由みえたり。さるはいづこにてもいふ詞にて古歌にトブサタテ足柄山ニ舟木キリなどあるはこのトホサキの事なる事うたがひなし

といへり。樵夫が木を伐りし後其梢を切りて伐りし木の根に立てて山神に謝するをいふ。倭姫命世記に

遠山近山ノ大峽小峽ニ立材ヲ齋部之齋斧ヲ以テ伐採テ本末ヲバ山祇ニ奉祭テ中間ヲ持出來テ云々

といへるもとぶさ立つるをいへるなり○有は布を誤れるなり○能登ノシマ山は今も能登島といひて七尾灣に横たはれり。俗に島之地といふとぞ。香島津より熊來村に行くには此島を右に見て行くなり○伊久代神備會とある心得がたし。まづ

カミビは今ハミヤコトミヤコビニケリなどの例によらば神めく事なり。又古くなる事はカムサビとこそいへ。たとひカミビとカムサビとを同語とすともイクヨノカミビゾ又はイクヨカミビタルゾといふべきなり。香島より久麻吉をさしてこぐふねのかちとる間なく京師しおもほゆ

上(七〇頁)にも同じ作者の

白浪のよするいそみをこぐ船のかちとる間なくおもほえし君

といへる歌あり

鳳至郡渡ニ饒石河之時作歌一首

いもにあはずひさしくなりぬにぎしがはさよき瀬ごとみにみなうら波へてな

鳳は鳳の誤なり。鳳至は和名抄に不布志と訓じたれど鳳はフに借るべからず。其上今もフゲシと唱ふれば和名抄に不布志と註したるは不希志を誤れるならむといふ。○饒石は今仁岸と書く。西海に注げる小流なり。熊來より陸路を西北に取りて饒石に到りしなり。ミナウラは契沖以下のいへる如く水占なり。伴信友の正卜考三卷(全集第二の五四七頁)に

美奈宇良は水占なるべし。然れども他に證考たることなし。波倍底奈はしひてかむがふるに延テムにて清き河瀬の水中に繩をはへわたし置てそれに流れかゝりたるもの或は其物の數などによりて卜ふる事にはあらざるか。といへり。思ふに波は安の誤ならむ。アヘテナは合セテムなり

從珠洲郡發船還太沼郡之時泊長濱灣作見月光作歌一首

珠洲のうみにあさびらきしてこぎくればながはまのうらにつきてりにけり

右件^ヲ詞者依^ニ春出舉^ニ巡行諸郡^ニ當時^ニ所屬目^ニ作之^ニ大伴宿禰家持

鳳至郡より東北を指して珠洲郡に到りそこにて乗船して能登郡に還り來りしなり○太沼郡とある不審なり。契沖は

太沼郡は能登四郡(○能登、羽咋、鳳至、珠洲)の内此名なし。今按、和名集を考ふるに羽咋郡に太海(於保美)郷あり。然れば海を

誤て沼に作り郷を誤て郡に作れるなるべし
といひ二註も此説に従へり。案するに長濱は和名抄によれば

能登郡の郷名なり。さて長濱を経しを思へば東海岸に沿ひて歸りしなり。されば西海に面せる羽咋郡を過ぐべからず。太沼郡はおそらくは大沼郡を誤れるならむ。今鹿島郡(即古の能登

郡)の東南端に北大呑村南大呑村ありて氷見郡(もとの射水郡の西北部)の北端に隣れり。此大呑ぞ太沼を訛^ナれるならむ。長濱郷は大日本地名辭書に『今の崎山村、北大呑村、南大呑村なるべし』といへり。崎山村は北大呑村の北に接して恰珠洲郡より大呑村に還る途に當れり○題辭中の上の作は諸本に従ひて仰の誤とすべし

アサビラキは近くは十五卷(一一頁)に見えたり。朝に船を發する事なり。ヒラクは發に當れる事上(一八一頁)にいへる如し。出舉^スは春、貧民に稻を貸し秋、之に利を添へて返さしむるを云ふ。出舉の舉を或は返の義とし或は用の意とせり。日本後紀弘仁三年五月の下に

是以昔年停^ニ出舉^ニ、自^レ茲以後借^ニ求富民^ニ、至^レ于報償^ニ加利數倍^ニ、舉^レ者有^レ罪償^レ者受^レ弊

とあり。又靈異記卷下の第廿二に

汝用^{ハカリ}二斤二、出舉之時用^ニ於輕斤^ヲ、徵納之日用^ニ於重斤^ヲ、

とあるを見れば舉は貸といふことなり。○當時の下に依など
をおとせるか

怨^{オウツナク}鶯^ウ晚^ウ暝^ウ歌一首

うぐひすはいまはなかむとかたまたばかすみたなびきつきは
へにつつ

古義に

片待とはかたよりて待意にてひとへに待を云

といへれどカタマテはカタマツニと心得べし。○三四の間にイ
タヅラニといふことを加へて聞くべし

造酒歌一首

なかとみのふどめ爾^ニ奈^ト禮^カのりどごといひはらへあがふいのちもたがた

右大伴宿禰家持作之

まづいかなる機に又は何の爲に作りし歌なるかを詳にせざ
るべからず。契沖以下之を家持が酒を造らしめし時の歌とせ
る如し。然るに酒を造らしめし時の歌としてはナカトミノフ
トノリトゴトイヒハラへとありて祓を行ふ趣なると相かな
はざれば古義には強ひてミキタテマツルウタとよみて
造酒は酒をかむことを云字なれど此は酒をかみて神に献
ることを主といへる歌なればしばらくミキタテマツルと
よめり

といへり。まづ造酒はミキタテマツルとはよむべからず。次に
酒を造るは秋の事なるに此歌は前後の歌より推すに三月頃

の作なり。次に造酒を祝ひ又は酒を奉る歌としてアガフイ
 ノチモタガタメニ奈禮といへるいと狎れたり。顧みて神樂歌
 に酒殿歌あるを思へばこも亦酒殿歌にて造酒の時に酒つく
 りの歌ふ料として作りしならむ。更に次の巻の初頭に此年三
 月下旬に造酒司サカ令史シ田邊福麿に逢ひし歌あるを思へば右の
 造酒歌は福麿に乞はれて作りしならむ
 歌はかの十二卷(一九六頁)なる
 ときつ風ふけひの濱にいであつあがふいのちは妹が爲
 こそ
 なごと同じく祓の趣をよめる相聞歌なり○上三句を宣長が
 此歌は太祝詞言ヲ中臣ガイヒハラへといふ意かとも聞ゆ
 れど然にはあらじ。祓詞をさして中臣ノフトノリト言とい
 へるなり

といへるはいかが。中臣ノ讀ム祝詞といふことを中臣ノフト
 ノリトゴトといふべきは論なれど此歌のナカトミノをフ
 トノリトゴトの屬格とせば何をかイヒハラへの主格とせむ。
 さればナカトミノは主格とすべく初二の間にワガ爲ニとい
 ふことを補ひて聞くべきなり○イヒハラへは云ヒテ祓へテ
 なり。ハラへは令祓なり。但他をしてはらはしむるが故にハラ
 へといふにあらず。罪穢をはらはふは神の御業なれば人よりは
 ハラへといふなり。なほ云はば神に乞ひて罪穢をはらはしむ
 るが故にハラへといふなり。宣長は
 ハラヒは自するをいひハラへは令祓のつづまりたる言に
 て人にせしむるをいふ。罪咎ある人に負する祓なご是なり。
 萬葉十七にフトノリトゴトイヒハラへとよめるは人に負
 する祓にはあらねど人にあどらへてせさする祓なるべし

(○記傳卷六八三頁)

といひてこゝのハラへを中臣をしてはらはしむる事と誤解せし爲初句のナカトミノを主格と認むるを得ざりしなり○結句を略解にナレは汝なり。云々モ誰爲ゾ、汝ガ爲ニコソアレといふ意なり

といひ古義に爾はもしくは可字の誤にはあらざるべき歟。さらばタガタメカにて誰爲曾と云と同意なり。さてナレは汝ヨと云意にてタガ爲ゾ、タガ爲ニアラズ、汝ヨといふにやあらむ

といへれどもしる意ならばナガ爲ニコソといふべし。おそらくは奈禮は等可などの誤ならむ

(大正十四年十月講了)

門人正宗敦夫植字

辭のしをり

ア	あかにと	一二七	頁
	朝びらき	一八七	
	あしひき山ノ代ニ	一六四	
	あへてな	一八五	
	あゆの風	一七一	
	ありがよひ	一二八	
	闇神	一〇九	
イ	いきづきあまり	一六四	
	いや年のほに	一二八	
	異常ナル約言	一七九	
ウ	うがはたつ	一二七	

	秋の葉	一二一	頁
	葦附	一七六	
	あぶみつかすも	一七八	
	あまそそり	一四六	
	あゆひたづくり	一五五	
	ありたもとほり	一五七	
	一絶	一二九	
	いりたち	一一六	
	一種ノ枕辭 動詞ヲ省ケル	一六一	
	うさか川	一七七	

宇知久知夫利乃

一二六

うなび川

一二七

うらごひし

一五八

宇良奈氣

一一六

うらぶれ

一一六

云爾

一三六

氏ニさヲソヘタル

一六七

エ

葉端

一一〇

オ

おく妻

一二四

おと

一二三

太沼郡

一八六

おもひすぎめや

一四一

おもひやる

一五五

おやじ

一一四

カ

解咲

一一〇

毫

一〇九

かかす

一三九

香島津

一八二

かたかひ川

一四一

片まつ

一八八

片よりに

一三一

がね

一四二

かへりにだにも

一一五

かむからならし

一四三



かむからや

一二一

かむさび

一四七

かむながら

一四六
一四九

かむび

一八四

キ

歸鴻

一一一

君はあれども

一五二

くに故郷

一三五

くぬちことごと

一三九

ク

熊來

一八二

くもゐ

一四七

ケ

襖飲

一一一

けく

一一五
一五三

氣多

一八〇

けながし

一五三

叶

多

一〇九

言無不酬

一一〇

コ

こごしかも

一四六

心ぐし

一〇三

心ぐしめぐし

一一四

心やる

一二六

こしの海

一七二

こそ、、き

一六一

事とりもちて

一五五

ことはたなしれ

一〇三

こひすべなかり

一〇六

サ	造酒歌	一八九
	さならべる	一六三
	さまねし	一三四
シ	使君	一七〇
	信濃濱	一七三
	しひにてあれかも	一六七
	寫	一〇九
	爵	一一一
	初巳	一一一
	之乎路	一八〇
	准枕辭	一一九 一五八
ス	すがなく	一六八
	すそみ	一二二
	射 ^サ	一八一
	さぶし	一三五
	さ山田	一六七
	七步	一〇〇
	しぬぶ	二二三 二三八
	澁谷	一二二
	情神	一七〇
	緒	一一二
	しらぬりの鈴	一六二
	七五調	一六五
	須加の山	一六八
	すべのたごき	一六四

セ	すめ神	一二二
	嘯侶	一一一
	せす	一三八 一七九
ソ	そこば	一一一
	袖ふりかへし	一三二
	そよ	一六六
タ	多古島	一六五
	立山 ^{タチ}	一三七
	たづくり	一五六
	たて	一六二
	たばなれ	一六三
	たみ	一六五
	短懷	九八
	出 ^ス 舉 ^コ	一八七
	關	一一六
	袖かへす	一二五
	袖をりかへし	一〇二
	俗信	一一五
	ただか	一五七
	立山ノ別名	一四六
	たづさはり	一三〇
	たなしる	一〇三
	たぶれたる	一六三
	たむけの神	一五七
	探字	一〇九

対象物ヲ略セル	一一九	橋ノ實ノ小サキヲ玉ト貫キシ事	一三六
智水仁山	一〇〇	千重をおしわけ	一四六
つかす	一七九	月にむかひて	一二三
つなし	一六五	つゆじもの秋	一六一
テ 調試	一六九	彫龍	一〇〇
天骨	一〇九	橙橘	一一九
ト 略シタル	一〇三	德音	九九
時もかはさず	一五七	どこはつ花に	一一四
どこ夏に	一三九	となみ山	一五七
年かへる	一二七	とほじろし	一六一
とぶさたて	一八三	ともしぶる	一四二
とほのみかご	一六一		
年次ノ論	一七三		

ナ な、、そよ	一六六	名かゝす	一三八
なげかく	一五六	奈吳江	一七二
なすれたまふ	一一六	なづさひ	一六一
由	一一八	奈良路	一〇一
ニ にヲ省ケル	一〇一、一二七、一四二、一七六、一七九	に	一一九、一三六
にぎし川	一八五	新河郡	一三七
ネ 婦負	一七一	能登國	一八〇
ノ 寫	一〇九	能登の島山	一八三
能登郡	一八一		
のまく	一五七		
ハ 倍	一七一	はひつき川	一七八
はらへ	一九一	潘江陸海	一〇〇
ヒ 氷見江	一六五	發	一八一

フ	賦	一二〇	鳳至郡	一八五
	不次	一九九	布勢、水海	一二六
	腐鼠之餌	一六九	二上神	一二一
	二上山	一二〇	ふりしく	一四〇
	舊江	一二六	へなりて、へだてて	一一六
	へ 抄春	一一一		
	ホ ほと鷹	一六五		
	マ まかちか伊ぬき	一三一		
	まつだ江	一二七		
	まひ	一五八		
	ミ 見あきらむ	一三二		
	みこともち	一五二		
	みな占	一八五		
			見のさやけきか	一二七
			三島野	一六四
			みがほし	一一一
			まねし	一六六
			まつがへり	一六七

メ	賣比	一七一	もとな	一二七
モ	もだもあらむ	一一二		
	もり部	一六四		
ヤ	矢形尾	一六二	家持ヲ祭レル社	一一二六
	家持等ノ修辭		一一四、一一七、一三〇、一四二、一四七、一四九、一五二、一五三、一七三、一八四	
ユ	ゆるす	一六三		
ヨ	よし	一一六	四度使	一二五
	よのあひだも	一三三		
ラ	ら	一六五	來燕	一一一
	廊廟に坐す	一〇〇	亂	一一〇
リ	流曲	一一一	琳瑯	一〇〇
レ	踏釘	一一一	戀緒	一一三
	未來ヲ現在ニテ受ケタル	一二五、一五六		

ロ 勒韻

一〇九

ワ 忘れておもへや

一七三

エ 彫り難し

一〇九

ヲ 雄神川

一七六

をす國

一五二

をつつ

一二二

訂正

十六卷^一九頁^二 美禰良久埼

一八二

をく
をち
をてもこのも

一六四

一六三

一六四

大正十四年十二月二十日印刷
大正十四年十二月廿七日發行

二百六十部印刷
非賣品

著者 井上 通泰

發行及印刷者 正宗 敦夫
岡山縣和氣郡伊里村大字穗浪三一〇七番地

印刷所 正宗 活版所
岡山縣和氣郡伊里村大字穗浪三一〇七番地

發行所 歌文珍書保存會

岡山縣和氣郡伊里村大字穗浪

186
159

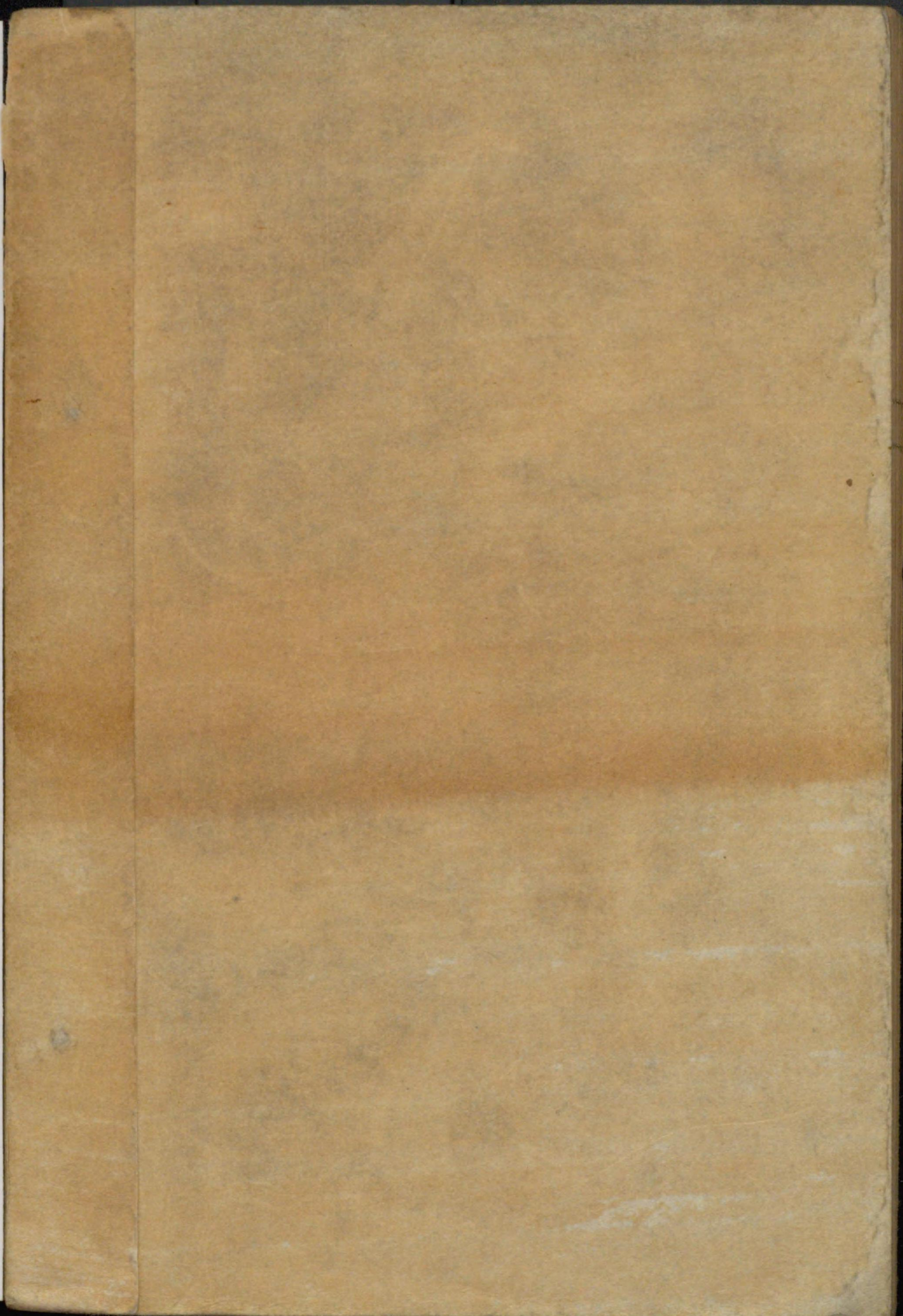
魏休河

文修善社

大正十四年十二月廿九日發行
大正十四年十二月二十日印刷

東京
大正十四年

井上 廣
東京 大正十四年

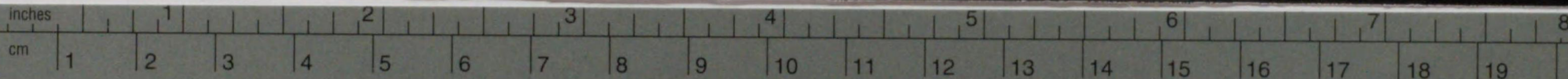


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

